正十三年、誓子は東大法学部の三年生（当時の大学の学部は三年制）で、高等文官試験を受けるために鋭意勉学中であった。高文試験の成績如何は、そのころの法科系統の学生の将来を決定するものだったのである。貧寒とした下宿で、ひとり外套などひっかぶりながら、埋み火をかきたてている作者の姿が目にうかぶ。

教年前、沢木欣一さんの主宰している俳誌「風」が二十周年記念号を編んだとき、諸方面に〈近代俳句中の愛誦句〉を尋ねるアンケートを発したことがある。その際、請われるままにわたしはこの句をあげておいた。ところが四十名ばかりの回答者のうち、わたしをふくめて四名が同一の句をあげたのだった。万をもって数えられるはずの近代俳句の中から、十名に一人の割で同一句を選ぶというのは、いささか異常である。東京新聞が文芸欄のコラムでさっそくこのことをとりあげ、「興味深い現象だ」とか評していたことを覚えている。

要するに当節は、学問するためには物心両面でしのぎにくいご時世なのであろう。そのことを暗々裡にみながら感じていて、それがはしなくも如上のアンケートの結果をもたらしたものと思われる。が、学問の世界には、由来この句にみられるような〈さびしさ〉はつきものなのである。ただ、昨今のようにお互いに激流にもまれていると、それがことのほか身にひびくというまでにすぎまい。

で、あえて青臭の言辞を弄するなら、学問の府である大学にあっては、常住そうした〈さびしさ〉が核として存在すべきであるように思う。ところでわたしが、そんな気味を面貌にただよわせた学生諸君を目にするのは、いつも四年のゼミの後期――それも肌寒さを覚えるころだ。もっと具体的にいえば、卒論の執筆にかかりだすころである。それまで〈楽しさ〉いっぱいだった諸君の顔が、にわかに曇りだす。

「苦しいかね」「苦しいです」――そんな楽しい会話が、親身に諸君と交わせるようになる。その会話がやがて、「苦しいかね」「でも、すこし楽しい」というふうに変りはじめるのが、十二月の声を聞くころ。そのころには、「もっと早くから取り組めばよかった」「もう二、三年ほしい。そうしたら、もうすこしましなものが書けるようになるかもしれません」といった嘆声も、諸君から洩れるようになる。それは諸君が、真に女子大生らしい美しさに輝く季節である。

そして卒論の完成、提出。面接をすませ、重荷をおろした諸君は口をそろえて、「はじめて勉強をしたような気がします」という。そうして本当の美人になったところで、諸君はそそくさと校門を出ていってしまう。そのくり返し。――ただ思う、そういう沈着で、キラキラしい瞳を輝かす学生諸君に、いつもあふれているべき大学のあり方を。激動・混迷する世情の中にあっては、なおさらに、である。

卒論雑感 ――近代

山崎　一穎

今まで三期生（十二名）と四期生（二十五名）の近代文学関係の卒業論文の指導にあたった者として、気付いた事を述べて見たい。

卒業論文のテーマが、カリキュラムで採り挙げた作家研究、作品

研究と同一であると言った弊から、徐々に抜け出して来ている事は喜ばしい事である。各大学に共通して言える事は、年々近代文学専攻の学生が多数を占めている事である。けだし、その内実は、非常に熱心か、さもなくば、怠け者に峻別されるようである。本学は一様に皆熱心である。ただし、熱心さの方向がいささか異っている面も見られなくない。不断から論文のスタイルについては、喧しく言って来たので、それは出来ているが、やはり、原典を精読する仕方と、その中から問題点を見出して、論理化する力が不足している。原典を精読することを強調すると、論文はその要約になってしまったり、逆に問題意識が旺盛故に、論理が上滑りしてしまって、独断に落込んでしまうという矛盾も見られる。卒直に言えば、三年次のレポートの方が面白いのに、四年次になると、つまらなくなるのは何故であろうか。どうも四年次になると、他の研究論文が気になると見えて、それに倚懸って、原典を離れてしまっているのではなかろうか。どんな形のものでも、己れの肺腑から滲み出たものであってほしい。近代文学関係の文献の調査の仕方がまだ十分でない。喫茶店に入るように気易く図書館に入りたいものである。

大分悪口を書いたが、私のゼミの論文の傾向について述べてみたい。明治・大正・昭和にわたっており、中々バラエティに富んでいて一概に言えないが、作家論より作品論が多い。傾向としては悪くないが、全体を見通す力が不足しているとも言えよう。島崎藤村、夏目漱石、森鷗外、有島武郎、芥川竜之介等が多い。樋口一葉、林芙美子も見られる。作品の成立過程を検討したものとして、『時任謙作』から『暗夜行路』へ、『或る女のグリンプス』から『或る女』へといった論文も見られる。一つのテーマを決めて、広く展望しようとした論文として、〈樋口一葉日記に見られる意識の流れ〉、〈独歩文学に見られる自然観〉、〈自然主義文学に於ける家の考察〉、がある。また児童文学としては、藤村との関連で把えた宮口しづえ、宮沢賢治、新美南吉等も見られる。私のゼミは八〇枚で書くように言っているので、作品であっても、前後二・三の作品を考究しており、今一歩進むと作家論の糸口になって大変良いと思っているのだが。新しい分野としては、鷗外の創作集『走馬燈』『分身』の世界を検討した論文もあり、夏目漱石の『漾虚集』『夢十夜』を〈見るもの〉と〈見られるもの〉という発想で把えた論文もある。

年々テーマも広がりつつあり、喜ばしい事であるが、更に自己と切り結ぶような論文でありたい。小さくて大きな世界を構築したいものである。諸君等の努力に期待したい。

卒論を読んで ——近代

菊地　弘

このところ暮から新年にかけて卒業論文を読むのが慣わしとなってしまった。卒論を読むのだと心に決めてしまえば、落着いてしまうもので、慌しく動きまわっている世間の有様がむしろ滑稽に思えてくる。世間を横目で見ながら、私は一枚一枚の卒論原稿を余裕をもって読むことが出来るのである。

常日頃、卒論の対象とする作家はできるだけ大きな作家を選ぶように、またできれば個人全集の刊行されている作家がいいと指導していることと、この二、三年私が演習で行っている授業が一九一〇